

# 音楽的表現育成プログラムの活動第4段階における拍感の形成過程の特徴

—異なる保育形態における実践過程の分析を通して—

佐野美奈

(大阪樟蔭女子大学)

## Characteristics of Pulse Formation Phase of a Program for Musical Expression Development: a Qualitative Analysis with Different Forms of Nursery Education

Mina SANO

### Abstract

This study aimed to examine the characteristics of pulse formation among young children by means of a program for musical expression development with different forms of nursery education. I examined these characteristics before and after the implementation of the program by means of quantitative analysis of the results of a musical test taken by the participants. I took part in the program and gave the test before and after music practice at a nursery school that followed the Montessori educational approach. I also made a qualitative analysis of the performance of the schoolchildren, who lacked musical experience, to consider the characteristics of the practical process of pulse formation. As a story and role understanding advance, young children's expression indicated the recognition of pulse in the fragmentary reproduction and role playing until the third phase of the activity comes to be created. K nursery schoolers received music and did expression indicating the recognition of pulse as role playing for every movement. Furthermore, it was clarified that the practice of the musical expression upbringing program encouraged to recognize musical elements of K nursery schoolers through the quantitative analysis.

### I 研究の経緯

筆者は、幼児期の発達の特徴としての劇化を生かした音楽経験を構成し、実践過程の分析考察を通して、音楽的表現育成プログラムを考案し、保育園や幼稚園の3歳児、4歳児、5歳児にその実践を行ってきた<sup>1)</sup>。2011年度には、U保育園だけにその実践プログラムを実施し、2012年度には、K保育園だけにその実践プログラムを実施した。その2012年度の実践過程で特徴的であったのは、拍感の認識を示す表現が活動の段階ごとに深化していく過程であった。

拍感の認識の形成過程に関しては、乳幼児期からの子どもの縦断的研究が見られる。それらには、言語獲得期における音声表現と言葉との分岐や身体表現との関係性についての事例分析が挙げられる(細田2002; 細田・小野2003; 岡林・坂井2010)。エスノメソドロジーの会話分析を通じた事例による縦断的研究(Forrester, M., 2010)では、1歳から3歳10カ月までの乳幼児の音楽性の発達について考察されている。一方では、それらのような事例分析を通じた考察に対して、幼児のリズム反応としての拍感に関する実験的な研究も見られる(鈴木・腰山: 菅生1990; 鈴木ら1991; 鈴木1988)。水野(2012)は、音楽鑑賞時に発生する幼児の手拍子反応を行動分析装置を用いて分析する実験的研究を行なっている。それらは、乳幼児期の発達研究に関するものであり、主に子どもの実態を明らかにしようとするものであった。

それに対して筆者は、これまでの調査対象であった遊び中心とは異なり、対照的な保育形態・保育方法

で日々の保育を受けている保育園児の拍感の形成について比較分析するために、音楽経験以外の日常生活訓練についてモンテッソーリ・メソッドの保育形態がとられているK保育園の3歳児、4歳児、5歳児を調査の対象とした。本稿では、筆者による音楽的表現育成プログラムのK保育園における実践過程で、劇化と音楽との統合の過程が進んでいる第4段階の活動に焦点化して事例の考察を行い、さらに、この実践プログラムの実施前後に行った筆者の考案による音楽テスト(佐野 2014)の結果について定量的分析を行うことを通して、音楽的諸要素の認識の変化についても明らかにしたいと考えた。

## II 研究の目的と方法

この研究の目的は、異なる保育形態のもとでも、教育的効果が見られた音楽的表現育成プログラムの実践過程の分析を通して、幼児の拍感の形成に関する特徴を見出すことである。さらに、その実践プログラムの実施前後で対象児に音楽テストを行い、その実践の効果について、定量的分析を通して明らかにすることである。

そのために筆者は、2011年度に音楽テストの対象園となったK保育園の3歳児、4歳児、5歳児に、筆者による音楽的表現育成プログラムを実践した。その実践期間は、2012年5月初頭～2013年3月初旬であり、対象児を3歳児20名(男児10名 女児10名)、4歳児19名(男児7名、女児12名)、5歳児18名(男児9名、女児9名)とした。音楽的表現育成プログラムの4段階の活動を、1か月ごとの活動に区切り、その各1回目の活動時には、筆者が、対象園児と担当保育者と共に活動を行い、2回目以降の1か月間ずつ、その活動を対象園児と保育者として行った。その実践過程を筆者が、毎週1回ずつ、3歳児、4歳児、5歳児について30分間ずつ、計35回の観察記録をとった。本稿では、それらの中でも特徴的な事例について、音楽的表現育成プログラムの劇化と音楽の統合を目的とした第4段階の活動を対象として、拍感の形成の視点から考察するものとする。

次に、筆者が2011年度初頭、2011年度末、2012年度末に行った音楽テストは、「強弱」「数・長短」「リズム」「高低」「協和」「表現・鑑賞」の6領域60項目から成っている。その音楽テストは、特に表現・鑑賞について、絵から音楽の想像上の感情を解釈する想像力の発達が考慮に入れられているという点から、「音楽素質診断テスト」(茂木ら 1959)を参照して筆者が考案したものである。ここでは、2011年度末と2012年度の2回ともその音楽テストを受けた子どもを対象とする。

## III 結果と考察

### 1. 音楽的表現育成プログラムの活動の第4段階における拍感の形成過程の考察

活動の第4段階では、ストーリーの劇化で、断片的な役割演技から、ストーリーを拡張したりしながら作品の表現へと移行する。それらの活動は、第3段階までの活動を統合するものであった。

以下に、K保育園における拍感の形成過程に特徴的であった事例を3歳児、4歳児、5歳児の順に挙げて考察する。

#### (1) 音楽的表現育成プログラムの活動の第4段階における拍感の形成過程の事例分析

##### (1)－1 3歳児について

事例K4-1 2013年1月10日 9:53～9:56

子ども達：保育者の弾く「犬のおまわりさん」に合わせて輪になって一方向に歩く。1拍に1歩ずつ、スキップに近い跳ねるような歩き方をする男児達。① 曲が止まると立ち止まる。

保育者：「いちにのさんでおはよう」を弾く。

子ども達：…「ジャンプをしよう」と大声で歌い、拍に合わせて2回、両足を揃えて跳びはね、床にドンと着地することを繰り返す。②

事例K4-2 2013年1月10日 9:56～10:03

保育者：「朝の挨拶を済ませた子ども達は、おさんぽに出かけました。」「さんぽ」を弾く。

子ども達：3、4名ずつ一列に後ろに繋がって、グループごとに異なる方向に向かい、歌いながら進む。走り出す。

保育者：「どんぐりころころ」を弾く。

グループ1(男児1名女児2名)：その場で立ち上がりずずを持ち、「どんぐりころころ」に合わせて「●タン」を繰り返したたく。③

事例 K4 - 3 2013 年 1 月 31 日 9:50 ~ 9:54

保育者: 「いぬのおまわりさん」を弾く。

子ども達: 曲の前奏が始まるとすぐに立ち上がって、歌いながら歩き始める。拍に合わせて輪になって回る。1 拍ずつ、跳ねるようにして歩く男児達。拍に合わせてスキップしている女児 3 名。④…

保育者: 「さんぽ」を弾く。

子ども達: 3 名, 2 名, 4 名, 3 名, 3 名の男女グループに分かれ、それぞれ歌いながら進む。拍を意識した歌い方, 1 拍一歩ずつの進み方になる。⑤…

保育者: 「ついてとって」を弾く。

人參グループ男児 1 名女児 3 名: 曲に合わせてボールを両手で持ったまま, 1 拍目で床につき, 2 拍目でそのボールを立ち上がって腹の前の位置に持つ動作を繰り返す。⑥

事例 K4 - 4 2013 年 1 月 31 日 9:54 ~ 10:00

保育者: 魔法使いのテーマ曲を弾く。

魔法使い役男児達: 子ども役の周囲をぐるぐる走り回る。

魔法使い役男児達: 「トントントーン (ドドドー)」拍に合わせて戸をたたく動作を片手でしながら、その動きに合わせて歌う。「よるだ、おきよ (ドミ b ソ, ソミ b ド)」トントントーン (ドドドー) わたしといこう (ドミ b ソ, ソミ b ド)」と歌う。⑦

子ども役女児達: 「どこへ、いくの (ドミ b ソ, ソミ b ド)」輪の外側、男児達の方に向かって歌う。⑧

魔法使い役男児達: 「わたし、いこう (ドミ b ソ, ソミ b ド)、まほうの、くにへ (ドミ b ソ, ソミ b ド)」と、子ども役女児達の方を向き、「まほうの、くにへ (ドミ b ソ, ソミ b ド)」のところでは、背を向けて、向こうを片手で斜め上を指差しながら、その手を拍に合わせて上下させながら歌う。⑨…

事例 K4 - 1, 事例 K4 - 2 では、全体のストーリーのうち、これまでの第 1 段階から第 3 段階までの活動の再構成の部分で断片的に行っている。そのなかで、ボールとひもは、第 2 段階の音楽に合わせた動きによる想像上のボールの操作と綱引きに用いられ、すずは、第 3 段階のリズムパターンの経験に用いられる。ストーリーの最初は、子ども達が歌い朝の会をするときの様子を構成しているのであり、その象徴として「いぬのおまわりさん (さとよしみ作詞, 大申恩作曲)」や「いちにのさんでおはよう」の歌遊びをしている。その活動で、下線部①②に示した拍感の認識を示す表現が生じていることがわかる。続く活動は、ストーリーの中で子ども達が公園に行ったときに体験する遊びとなっている。それらのうち、第 3 段階の平易な活動は、「どんぐりころころ」のリズム経験であり、それは下線部③に示した拍感の認識を示すものになっている。第 2 段階の動きのイメージの確立を目的とした活動も、ボールをついてとってするとき、拍感を伴うものである。2013 年 1 月 16 日の活動の際も、「お・は・よう」の一文字に 1 拍 1 回ずつ合わせて両足を揃えて跳ねる」といった拍感を示す自発的な表現が生じた。2013 年 1 月 16 日の活動では、事例 K4 - 1, 事例 K4 - 2 に続くストーリーの劇化が行われている。それまでの子ども役女児が中心に、その周囲を魔法使い役が輪の形態で取り囲むのではなく、女児達が形づくった輪に対面する形で男児達が横並びになっている。2013 年 12 月に行っていた魔法使いと子どもとのやりとりや動物園での動きの表現や応答唱も繰り返され、最後に保育者の「ほうきに乗っておうちに帰ることになりました。」というナレーションで、全員が大きな輪の状態で、魔法使いのテーマ曲に合わせてぐるぐる勢いよく走るという内容となった。2013 年 1 月 24 日の活動では、最初に「ここは、魔法の保育園です」という保育者によるナレーションで始まり、途中の場面展開には、「兵隊の行進 (シューマン作曲)」が用いられている。

事例 K4 - 3 では、ひととおりストーリーの劇化を経験して、それぞれの役割演技に対する理解が深まってきたところである。そのために、「いぬのおまわりさん」で、下線部④の拍感の認識を示す表現が自然に生じている。また、「さんぽ」の歌では、下線部⑤の拍感の意識化が行われている。「ついてとって」では、下線部⑥の動きが共有されるようになった。最初は子どものうち女児 1 名だけであったのが、2013 年 2 月 7 日 9:50 ~ 10:00 の活動では、女児達だけがボールを持ったまま拍に合わせて動かし、2013 年 2 月 22 日 9:50 ~ 10:00 の活動では、その活動を担当する子ども達が皆ボールを両手で持ったまま、「ついて」で前かがみになってボールを前の床に着け、「とって」でもとに戻す行動を繰り返すようになっていた。それは、拍感の明確化に伴って、実際のボールの操作よりも、音楽に合わせた動きをすることを子ども達が重要視するようになったためであると考えられる。また、事例 K4 - 4 における魔法使いと子どもの応答唱の際には、下線部⑦⑧⑨に示した拍感を表現する動きが創り出されていることがわかってい

る。ストーリーの最後も、「女兒達が小さい輪になり、その周囲を男児達がぐるぐる回り、男児達がまず端に走っていく。同じ曲の2回目の繰り返しで、女兒達が輪から外れて、全員、端に寄る。」といった動きの形態によって、ストーリーの終結を示すようになった。

このように、3歳児のストーリーの劇化過程は、保育者が最初主導的にかかわり、動機づけをしているが、劇化表現自体が、これまでの活動の第1段階から第3段階までを端的に再構成してストーリー展開されたものとなっている。そのため、子ども達は、第3段階までの経験を繰り返す中で、各段階で自らが行っていた拍感の認識を示す表現を、さらに再考して進展させるようになっていっていることがわかる。

#### (1)-2 4歳児について

事例 K4-5 2013年1月10日 10:03~10:10

保育者：…「さんぼ」を弾く。

子ども達：大声で歌いながら行進し、足音を拍に合わせて歩く。⑩「いっぽんばーしーに」の歌詞を強調する。

保育者：「動物園へいこう」を弾く。

子ども達：輪の内側に向かって立ったままで歌う。拍に合わせて足の重心を左右変える男児。⑪2番まで歌う。

事例 K4-6 2013年2月22日 10:05~10:18

保育者：「とけいのうた」を弾く。

子ども達：全員で歌う。動作をつけながら、「こーどものはりと」の1拍目でしゃがみ、歌詞「おーとなのはりと」の1拍目で立ち上がる。はりを、両手を頭上で突き合わせることによって表す。振り子の動きを、拍に合わせて両腕を左右に揺らすことで表す。⑫…

保育者：シューベルトの子守歌を弾く。

全員：真ん中に寄って小さく輪になり、しゃがんで眠ったふり。ピアノのこの曲の最後の音を、「ピン」と歌う男児。

事例 K4-5 では、魔法使いと子どものやりとりの場面を繰り返し、ストーリーの続きを劇化している。魔法使いと子どもが行った魔法の国を「さんぼ」し、「動物園」で動物に出会うというものである。その過程において、下線部⑩⑪に示した拍感の認識を示す表現が生じている。また、2013年1月16日10:05~10:10でもストーリーの途中までが行われ、「さんぼ」の歌については「あるこう、あるこう」と大声で歌いながら、拍に合わせて行進する」といった拍感を表し、2013年1月24日10:05~10:12の活動では、「動物園へいこう（海野洋司作詞、Tom PaXton 作曲）」の歌詞2番の「ぞうのはなはなーがいぞ」「おっとせい」という歌詞からイメージできる動物の動きをして歌い、「おはなブンブン」の拍に合わせて片腕を左右に大きく揺らすといった拍感の認識を示す表現が生じた。同様の事例は、2013年1月31日10:05~10:12の活動でも生じ、「ライオンの大行進（サンサーンス作曲）」では、ライオン役男児4名が他児達と平行に対面するかたちで一列に並び、「ガオーッ」と言いながら、拍に合わせて、前足でひかくふりの動きをするといった拍感の表現も見られた。その活動の際、ストーリーに「時計が鳴る」ことが加わり、子ども達は、「とけいのうた（筒井敬介作詞、村上太朗作曲）」を歌いながら輪になって立ったまま、拍に合わせて両腕を左右に動かし、時計の針について、両腕を頭上で突き合わせ、三角をつくって歌詞に合った動きをすることが生じた。そうした表現における動きの変化は、2013年2月7日には子ども同士で持続的に共有され、動物園での動物と子どものやりとりがある場面では、対象となる動物役と子ども役に分かれて対面し役割演技することで、子どもは役割理解を深めると同時に、拍感の認識を示す動きや音声による表現が大きくなった。例えば、「ライオンの大行進」の曲では、1拍目で「ガオーッ」と言いながら、片手を前足でおそいかかるかのように動かすといった子ども達の表現が大きくなり、迫真性が伴ったのである。また、「白鳥（サンサーンス作曲）」の音楽では、白鳥役の女兒達が子ども役の男児達に向かい合い、拍に合わせて両手を上下にゆっくり動かして、白鳥が飛んで行く動きをする表現が大きくなった。さらに、「ふしぎなポケット」を歌いながら歩くとき、拍に合った動きをつけるようになった。この日、ストーリーの最後が、シューベルトの子守歌で「子ども達が眠りにつく」といった表現となった。

事例 K4-6 では、事例 K4-5 と同様の活動を行っているが、ストーリーの後半の時計が鳴る部分で、「とけいのうた」を子ども達が歌うとき、下線部⑫に示した具体的な動きの表現がなされていたことが進んだ点である。また、ストーリーの最後で、保育者のピアノに合わせて、シューベルトの子守歌の最後の

音を「ピン」と音程をつけて歌うといった自発的表現も生じた。これらの表現は、拍感の認識を明確に示すものであり、活動の第3段階までの経験に基づいてストーリーの劇化を行ったために生じたものであると捉えられる。

このように、4歳児では、3歳児と少しストーリーの構成が異なり、拍感を示す子ども達の表現も複雑化していることがわかる。活動の回数が進むたびに、歌の歌詞に役割演技を見出し、「動物園へいこう」や「とけいのうた」に見られるように拍感の認識を示す表現をするようになり、音楽が表そうとする事象の表現が拍感を伴って大きくなったりしていることがわかる。

### (1)-3 5歳児について

事例 K4-7 2013年1月10日 10:10~10:14  
Aグループ：床に横になり眠ったふりをする。  
保育者：曲を弾くのを止める。  
魔法使い役Bグループ：「よるだ、おきよ（ドミソ、ソミソ）」「わたしといこう（ドミソ、ソミソ）」と歌いながら両手を前に差し出し、拍に合わせて上下させる。⑬  
子ども役Aグループ：「どこへいくの（ドミソ、ソミソ）」…  
保育者：魔法使いのテーマ曲を弾く。  
子ども役Aグループが中心に寄り、魔法使い役BグループがAグループの周囲をくるくる走る。

事例 K4-8 2013年1月10日 10:14~10:18  
子ども達：2列に並び、「バスごっこ」を歌いながら動作をつけ、前進し、次第に2人ずつ向かい合って「おとなりへ、はい」と歌う。再度、3番の歌詞でも、拍に合わせて大きいハンドルを左右に大きく動かすふりをする。「ごっつんこ、ドン」で拍に合わせておつかり合い、「おしくらまんじゅう、ギョッギョッギョー」で、拍に合わせて押し合う。⑭  
保育者：「バスに乗っていると、公園が見えたので、寄り道をすることにしました。楽しくなってきたので歌を歌いました。」「さんぽ」を弾く。  
子ども達：手拍子しながら歌い歩く。「でこぼこ、じゃりみち」の歌詞部分では拍に合わせてスキップする。最後の拍で、片手を家前方にこぶしにして上げる。⑮  
保育者：曲が終わる。「みんなでおやつを食べました。」「ふしぎなポケット」を弾く。  
子ども達：その場に止まって「ふしぎなポケット」を歌いながら、拍に合わせてポケットをたたく。歌詞に出てくる2つ、3つといった数字をその拍に合わせて指で示す。⑯

事例 K4-9 2013年1月10日 10:18~10:20  
保育者：曲を終える。「とても甘いおやつだったので、それを見ていたバイキンが出て来ました。」  
子ども達：1人の保育者と一緒に歌いながら、拍に合わせて「ふしぎなポケット」の動作を考え試みる。⑰  
男児6名バイキン役：もう1人の保育者と、バイキン役表情や動作を考える。右手と左手をこぶしにして交差させながら、顔をしかめる。

事例 K4-10 2013年1月16日 10:15~10:20  
保育者：「虫歯建設株式会社」を弾く。  
バイキン役：「ドドドド、ガガガガ」の部分では、両手でドリルを床に向かって操作しているかのような動きを大きくする。歌いながら、「西へ東へ」のとき、1拍毎に右に左に動いて探しているかのような動作をする。⑱  
魔法使い役子ども役：歌いながら手拍子する。1回目の「ムシムシバババ、ムシバババ」の歌詞のときは、対面しているバイキン役が拍に合わせて大股に前進し、手をつないだ魔法使い役子ども役が、一歩ずつ拍に合わせて後退し、2回目の「ムシムシバババ、ムシバババ」で、魔法使い役子ども役が拍に合わせて大股に前進して、バイキン役が一歩ずつ拍に合わせて後退する。それらの動きは、拍に合わせた足運び（1、2、3、4）によって、うまく曲に合っている。⑲

事例 K4-11 2013年1月24日 10:15~10:20  
バイキン役4名：「チョコレート」「ビスケット」で、それらの形を両手で形つくる。「…掘り起こせ」でドリルを床にかける動作、「歯磨きしない…」で歌詞の動作をする。「西へ、東へ」では、片手を額にかざし、左右に動く。「ムシムシバババ、ムシバババ」で、バイキン役が魔法使い役子ども役に向かって拍に合わせて前方に歩き、魔法使い役子ども役が拍に合わせて後退する。次の「ムシムシバババ、ムシバババ」で、魔法使い役子ども役が拍に合わせて前進し、バイキン役が後退する。大声で歌う。⑳  
保育者：「魔法使いが、魔法の国で、バイキンをやっつけてくれることになり、魔法の国へ行くことになりました。」「天国と地獄」を弾く。  
魔法使い役とバイキン役：向かい合い、曲の拍に合わせて進んだり後退したりしながら剣で戦うふりの動きをする。㉑

3歳児、4歳児とストーリーの異なる5歳児の事例の特徴は、ストーリーと役割の複雑化にある。事例K4-7は、ストーリーの前半で、魔法使いと子どもの応答唱によるやりとりの場面である。その中で、魔法使い役が子ども役に呼びかけるとき、下線部⑬に示した拍感を表現する動きが生じている。

事例K4-8では、魔法使いと子ども達が魔法の国に行き、歌遊びによって遊びを再演する過程で、拍感の認識を示す表現が生じている。それは、「バスごっこ（香山美子作詞、湯山昭作曲）」の下線部⑭の動きの表現においてである。さらに、「さんば（中川李枝子作詞、久石譲作曲）」の歌で下線部⑮に示した歌詞のイメージによって創り出された動きと拍の一致が見られた。また、「ふしぎなポケット（まどみちお作詞、渡辺茂作曲）」では、下線部⑯に示した表現が挙げられる。

事例K4-9では、新しいバイキン役が出てくる場面で、ストーリーの創造が、子ども達と保育者によって考えられている。拍感の認識を示す表現は、下線部⑰に生じている。2013年1月16日10:10～10:20でも、事例4-7から事例4-9までと同様の活動が見られたが、そのストーリーの続きが創造され、劇化過程が進んでいることが、事例4-11に表れている。

事例K4-10では、拍感の認識を示す表現は、「虫歯建設株式会社（田中みほ作詞、小杉保夫作曲）」で、バイキン役の下線部⑱の動きに表れている。また、その歌詞の特定の部分では、下線部⑲の表現が見られた。さらに、ストーリーの続きを考えることを作品としての表現へ到達する動機づけとして捉えている。

事例K4-11では、ストーリーの最後の表現が考えられ、思考錯誤されているが、それ以前の「虫歯建設株式会社」の歌詞による拍感を動きで示す表現は、前回よりも動きが大きくはっきりしている。そうした表現は、下線部⑳のバイキン役男児4名の動きにも表れている。2013年1月31日10:20～10:23も同様の活動が行われ、「天国と地獄（オフエンバック作曲）」の音楽に合わせて、バイキン役と魔法使い役が対面して、剣で戦うふりの動きで、突いたり引いたりする動きが、曲の拍感を捉えていた（下線部㉑）。さらに、2013年2月7日10:23～10:25の活動では、「虫歯建設株式会社」を弾き、子ども役魔法使い役とバイキン役とが対面して、拍に合わせて前方に進んだり後方に後退したりするときの一步一步が大股になったり、バイキン役が剣でやり合うかのように互いに前進と後退を繰り返し、剣を交える動きをするその動作1つ1つが「天国と地獄」の拍に合うように、大きくなったという変化も生じた。最後に役割演技として、勝った魔法使い役が飛び上がり、対面したバイキン役が泣きふりや座りこむといった想像上の感情を表現しているところに、劇化によるストーリー理解が、音楽によって促進されていることが表れている。2013年2月22日10:24～10:27の活動における拍の表現は、これまでの事例に示した活動と同様であり、それに加えて「ふしぎなポケット」で、魔法使い役と子ども役が2列に並んで拍に合わせた手拍子をしながら進み、「ビスケットはふえる」という歌詞の最後の拍で跳び上がるといった拍感を示す表現が生じた。また、「虫歯建設株式会社」でバイキン役男児6名が歌詞に合った動きを大きくしながら歌い、歌詞の「参上いたす」の最後の拍で跳び上がるといった自発的な表現が見られた。

このように、5歳児の劇化の過程では、ストーリーや役割演技の複雑化を伴うと同時に、歌詞の内容を、拍感を示す動きや音声の表現に置き換え、事象の表象化やストーリー理解を深めていることが、事例K4-7、事例K4-8、事例K4-9、事例K4-10からわかる。そうして、子ども達は、歌詞の内容のイメージをストーリー展開の中で繋げていくことができるようになる。その過程で、5歳児では、ストーリーや役割演技を保育者と子ども達とで試行錯誤しながら創り出すことができるようになっているのが特徴的である。さらに、ひとつひとつの役割演技においても、例えば事例K4-7に示したように、魔法使いの呼びかけが、応答唱としてだけでなく、下線部⑬に示した拍感を表すと同時に想像上の感情を表す役割演技となっているのは、子どもの役割理解とストーリーの想像上の感情理解に基づくものであると言える。

## (2) K 保育園児の音楽的表現育成プログラム第4段階の実践による拍感の認識の形成過程に関する特徴

以上の事例分析から、音楽的表現育成プログラムの第4段階の活動において生じた拍感の認識の形成過程について、K 保育園児の特徴を抽出して、表1に示した。それによれば、K 保育園では、3歳児に第1段階から第3段階までの活動の再構成の断片的な再現やストーリー理解、役割理解に伴って拍感の認識を示す表現が創出されていた。4歳児では、ストーリー理解による具体的な役割演技が、拍感の認識を示す表現であった。5歳児では、ストーリーにおける歌遊びの理解に伴う拍感の認識に基づいた表現の創出

や、歌詞による具体的な役割演技の創出における拍感の認識に基づいた表現の拡張が特徴的であった。4歳児、5歳児のストーリーや役割理解が進むにつれて、活動の第3段階までの断片的な再現や役割演技における拍感の認識を示す表現が創出されるようになってきていることがわかる。幼児達は、音楽を感受して一挙一動にまで役割演技として拍感の認識を示す表現をしていた。

表1 音楽的表現プログラムの第4段階におけるK保育園児による拍感の形成過程の特徴

3歳児	4歳児	5歳児
①1段階から第3段階までの活動の再構成の断片的な再現(事例K4-1, 事例K4-2) ②ストーリー理解による拍感の認識を示す表現の創出(事例K4-3) ③役割理解に伴う役割演技における拍感の認識を示す表現の拡張(事例K4-4)	①ストーリー理解による拍感の認識を示す表現の創出(事例K4-5) ②ストーリー理解に伴う具体的な役割演技における拍感の認識を示す表現の創出(事例K4-6)	①ストーリーと役割理解による拍感の認識に基づく表現の創出(事例4-7) ②ストーリーにおける歌遊びの理解に伴う拍感の認識に基づいた表現の創出(事例K4-8) ③ストーリー創造による拍感の認識を示す表現の創出(事例K4-9) ④歌詞による具体的な役割演技の創出における拍感の認識に基づいた表現の拡張(事例K4-10) ⑤役割理解とストーリーの想像上の感情理解に基づく役割演技の拡張(事例K4-11)

## 2. 音楽テストの結果の分析による音楽的諸要素の認識の変化について

ー 2011年度末と2012年度末の2回とも受けた幼児の音楽テストの結果に関する定量的分析ー

ここでは、2012年度に音楽的表現育成プログラムを実践したK保育園の4歳児、5歳児に関して、その実践プログラムの実施前後に行なった音楽テストの結果に焦点化して分析考察する。

### (1) K保育園における2011年度(3歳児時)と2012年度(4歳児時)の両方の音楽テストを受けた結果

2012年度初頭から1年間、音楽的表現育成プログラムを実践した対象児のうち、2011年度末3歳児時と2012年度末4歳児時に音楽テストを実施した園児のそれぞれ(2011年度末と2012年度末の両方の音楽テストを実施した園児のみ)について、対応のある粗点合計平均の差の検定を行った。その結果、統計上の有意差が見られ( $t=7.432$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、2012年度末の2回目の平均値が高かった(3歳児時に $\bar{x}=29.61$  ( $SD=4.48$ ), 4歳児時に $\bar{x}=39.03$  ( $SD=2.66$ ))。

さらに、2011年度初頭(音楽的表現育成プログラム実践前3歳児時)と2012年度末(音楽的表現育成プログラム実践後4歳児時)の2回とも音楽テストを受けた14人の(1)強弱、(2)数・長短、(3)リズム、(4)高低、(5)協和、(6)表現・鑑賞、粗点合計について、対応のある平均の差の検定を行った。その結果、(1)強弱( $t=8.498$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、(2)数・長短( $t=3.145$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、(3)リズム( $t=2.219$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、(4)高低( $t=8.653$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、(6)表現・鑑賞( $t=2.873$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )、粗点合計( $t=7.432$ ,  $df=13$ ,  $p<.05$ )について、統計上の有意差が見られ、音楽的表現育成プログラムの実践前後に差異が認められた。

### (2) K保育園における2011年度(4歳児時)と2012年度(5歳児時)の両方の音楽テストを受けた結果

2012年度初頭から1年間、音楽的表現育成プログラムを実践した対象児のうち、2011年度末(4歳児時)と2012年度末(5歳児時)の両方の音楽テストを実施した園児の粗点合計について対応のある平均の差の検定を行ったところ、統計上の有意差が見られ( $t=6.695$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )、2012年度末の2回目の平均値が高かった(4歳児時に $\bar{x}=36.8$  ( $SD=4.12$ ), 5歳時に $\bar{x}=45.15$  ( $SD=4.64$ ))。

さらに、2011年度末(音楽的表現育成プログラム実践前4歳児時)と2012年度末(音楽的表現育成プログラム実践後5歳児時)の2回とも音楽テストを受けた15人の(1)強弱、(2)数・長短、(3)リズム、(4)高低、(5)協和、(6)表現・鑑賞、粗点合計について、対応のある平均の差の検定を行った。その結果、(1)強弱( $t=5.219$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )、(3)リズム( $t=3.347$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )、(4)高低( $t=3.263$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )、(6)表現・鑑賞( $t=4.325$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )、粗点合計( $t=6.695$ ,  $df=14$ ,  $p<.05$ )について、統計上の有意差が見られ、拍感の形成にかかわる領域について2回目の音楽テストの平均値の方

が高く、音楽的表現育成プログラムの実践前後に差異が認められた。

#### IV 考察のまとめ

以上、本稿では、2012年度に異なる保育形態の保育園で実施した音楽的表現育成プログラムの第4段階の実践による、3歳児、4歳児、5歳児における拍感の認識の形成過程に関する特徴を抽出した。その結果、K保育園において音楽的諸要素の認識に向かうことが活動の中で具体的な表現として現れていることがわかった。この結果には、2007年度に同様の実践を行なったU保育園児の事例分析から抽出された特徴との相違点が見られた<sup>2)</sup>。U保育園では、劇化の要素が音楽的諸要素よりも明確に現れていたのである。しかし、その実践を行ったK保育園とU保育園の両方において、音楽的表現育成プログラムの第4段階では、劇化と音楽との統合過程としての役割演技に拍感の認識を示す表現が見られた。

さらに、2012年度の実践プログラムの実施前後で、前述の音楽テストを行っており、K保育園における2011年度末と2012年度末の2回とも音楽テストを受けた4歳児、5歳児について、その実践前後の得点に有意差が見られ、強弱、リズム、表現・鑑賞といった拍感の形成にかかわる領域で、2回目のテスト結果の方が高かった<sup>3)</sup>。

こうした分析考察の結果から、異なる保育形態の保育園児についても、音楽的諸要素の認識を促す音楽的表現育成プログラムの効果も見い出されたと考える。

#### 注

- 1) Boltonの劇化指導法や音楽と劇化とを統合したRubin & Merrionの活動の内容を参照して、筆者は劇化を生かした音楽的表現育成プログラムを考案した。それは、「1. はじめの活動」「2. はじめの活動からバントマイムへ」「3. 即興表現からストーリー創造、劇化へ」「4. ストーリーの劇化」の4段階から成る。それらは、日常生活経験の音への気づきによる事象のイメージを確立する活動に始まり、次第にリズムパターンや少ない音数のメロディによる応答唱等を通じた音楽的諸要素の経験と劇化との統合が進んでいく活動過程となっている。活動内容の概要は、佐野美奈(2009)「子どもの音楽経験促進プログラムの導入過程における擬音語、擬態語の役割について－実践の活動事例の考察を通して－」『学校音楽教育研究』第13巻 pp.215-226 に示されている。
- 2) この異なる保育形態による事例考察の比較は、佐野美奈(2013)「異なる保育形態における音楽的表現育成プログラムの実践過程の分析－第1段階の活動の分析を中心に－」『日本乳幼児教育学会第23回大会研究発表論文集』pp.314-315等に示されている。
- 3) 音楽的表現育成プログラムの実践前後における音楽テスト結果の詳細は、佐野美奈(2014)「異なる保育形態における幼児の音楽的諸要素の認識に関する定量的分析－音楽テストの結果から－」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻 pp.33-43に示されている。その中で、同時期に音楽テストを受けたU保育園、I保育園、K保育園の3園比較でも、統計上の有意差が見られ、K保育園の得点が、音楽的表現育成プログラムを実践しなかったU保育園、I保育園の得点よりも高いことが明らかとなっている。

#### 参考文献

- Forrester, M., "Emerging musicality during the pre-school years: a case study of one child," *Psychology of Music*, v38, n.2, 2010, pp.131-158.
- 細田淳子「ことばの獲得初期における音楽的表現－身体で感じるリズム－」『東京家政大学研究紀要』第42集, (1) 2002, pp.133-139.
- 細田淳子, 小野明美「ことばの獲得初期における音楽的表現(7): 乳幼児の拍の同期の様相」『日本保育学会大会発表論文集』(56) 2003, pp.264-265.
- 水野伸子「音楽鑑賞時の手拍子反応にみる幼児の音楽理解」『日本教育工学会研究報告集』12-3, 2012, pp.153-159.
- 岡林典子, 坂井康子「日本語の獲得期にみられる2拍のリズミカルな音声表現－幼児の生後11～17か月の観察より」『表現文化研究』10(2), 2010, pp.127-141.



佐野美奈「幼児の音楽的諸要素の認識に関する音楽テストの項目」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4巻, 2014, 資料 pp.67-74。

鈴木敏朗, 腰山豊, 菅生努「幼児の4拍子のリズムパターンに対する反応(1)」『秋田大学教育学部教育研究所 研究所報』第27号, 1990, pp.63-70。

鈴木敏朗, 腰山豊, 菅生努「幼児の4拍子のリズムパターンに対する反応(2)」『秋田大学教育学部教育研究所 研究所報』第28号, 1991, pp.61-73。

鈴木敏朗「幼児のリズム反応－3拍子(4分－8分－8分－4分)のグルーピング」『秋田大学教育学部研究紀要, 教育科学』38巻, 1988, pp.77-89。

謝辞 この研究における実践および調査にご協力賜りました保育園の諸先生と子どもたちに感謝申し上げます。なおこの研究は、科学研究費補助金(基盤(C)課題番号:25381102)の一部である。